〔技術のページ〕

平成19年度牛群検定成績から

岡山県総合畜産センター　大家畜部
研究員　有安　則夫

はじめに

バイオエタノールブームに端を発した、近年まれにみる飼料価格の高騰でしたが、昨秋より落ち着きを見せはじめ、また、３０数年ぶりの大幅な乳価の引き上げも決定しホッと胸をなで下ろしていらっしゃる農家の方々も多いことと思います。

さて、儲かる酪農経営をしていく上で飼料価格が安いことはもちろんですが、泌乳成績の向上を図り、１頭当たりの生産性を引き上げることも重要です。そのためにも牛群検定を活用して効率のよい経営を行っていく必要があります。

そのような中、今回は日頃よく耳にする「県内の泌乳成績はどれくらいなの？」「分娩間隔はどれくらいが平均なの？」などといった疑問に牛群検定成績からお答えしたいと思います。

なお､今回の成績は平成19年度のホルスタイン種検定終了牛成績及び農家検定成績より抽出しています。

１．県下の泌乳成績は？

「うちの乳量って他所と比べてどうなの？」お答えです。県下の平均乳量は305日乳量9,374kg､補正乳量9,738kgとなっています。18年度の305日乳量が9,372kgでしたので2kgの増になります。ちなみに19年度の305日乳量は北海道が9,050kg、都府県は9,298kgでした。

また、県下で乳量が一番多かった乳牛は305日乳量が20,487kg、補正乳量で20,864kgと平均の倍量の泌乳成績でした。

乳　量	305日乳量	補正乳量
	頭　数	頭　数
20,000kg以上	1	1
18,000kg以上	0	1
16,000kg以上	2	10
14,000kg以上	37	90
12,000kg以上	292	502
10,000kg以上	916	1190
8,000kg以上	992	1114
6,000kg以上	363	402
4,000kg以上	43	64

補正乳量(県平均)　9,738kg
305日乳量(県平均)　9,374kg

２．県下の分娩間隔は？

県下の平均分娩間隔は441日、18年度は445日でしたので、若干短縮されています。

全国的にはここ数年横ばい状況で、19年度の平均分娩間隔は北海道が428日、都府県は440日となっています。

また「乳が出ていると種が付かないの？」と尋ねられることがありますが、実際はどうなんでしょうか。そこで、相関係数を調べた結果、305日乳量と分娩間隔の相関は、0.158となり、ほとんど相関は見られませんでした。つまり、統計的には乳量が出ているから種が付かないということは言えないということです。

また、県下で一番乳量の多かった乳牛の直近の分娩間隔は388日となっています。

あわせて、乳量の上位３戸の305日乳量と補正乳量の乳量と分娩間隔を見てみましたが、分娩間隔については県の平均

を下回っており、飼養管理技術によるものが大きいと思われました。

	平均305日乳量	分娩間隔
1	12278.5kg	411.1日
2	12256.8kg	409.7日
3	12008.2kg	423.2日

	平均補正乳量	分娩間隔
1	12794.4kg	405.2日
2	12648.9kg	421.6日
3	12318.2kg	407.1日

３．飼養形態と乳量・体細胞数は関係ある？

「つなぎ牛舎と比較してフリースタイルのほうが、乳量が多い？」、「つなぎ牛舎やフリーバーン(FB)より、フリーストール(FS)のほうが体細胞数が少ないってホント？」といったご質問もよくあります。

では実際はどうなんでしょうか。補正乳量で調べてみると、FS:11,154kg、FB:9,759kg、つなぎ:9,467kg となっており、つなぎ牛舎と比較してフリースタイルのほうが乳量が多く出ています。

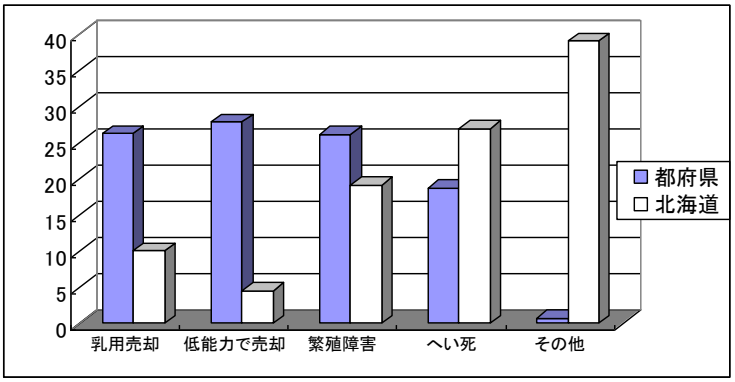
また、体細胞数について牛検成績からみると、FS:20 万、FB:31 万、つなぎ:29 万となっています。フリースタイルの農家戸数が少ないので、おからくの生乳検査成績でも見てみましたが FS:20 万、FB:31 万、つなぎ:30 万とほぼ同様な結果になりました。

ただ、これらの結果から単純にフリーストールが飼養形態として良い、あるいは乳房炎になりにくいなどとは言えません。それは飼養形態に関わらず、飼養管理に非常に気を配っている方、クオーターミルカーを利用するなどして生乳品質に気を遣っている方、様々な酪農家さんが多いことも事実だからです。あくまでも数値として参考にしてもらえればと思います。

４．耐用年数はどれくらい？

岡山県での耐用年数、除籍理由についてはデータがありませんが、都府県と北海道で取りまとめたデータがあり、地域により大きく異なります。まず、５才未満の除籍比率が北海道では 40.9％であり、都府県でも 38.6％と、５才を待たずして約４割の乳牛が除籍されていることになります。

また、その５才未満の除籍理由ですが、図にも示したように、北海道ではへい死が 27.4％と１番の理由となっています。一方、都府県では 30.0％が低能力を理由に売却され、除籍されています。このことから、都府県では泌乳能力に対しシビアであることが伺えます。



このように牛群検定成績からは、個々の酪農家の経営を分析するだけでなく、全国あるいは県下の酪農経営状況を推し量ることができます。そういった情報を活用して頂けるよう、今後も情報提供を行っていきたいと思います。

また、牛群検定を活用した経営見直しやコスト低減等についても、県とおからくの技術者が協力して指導を行っています。今後も、牛群検定成績を上手に活用し、生産性を向上させ、収益増へつなげて頂けるよう、取り組みを強化していきます。